

学校支援プロジェクト ハンドブック

令和8年度

【遠隔教育活用修学プログラム履修者用】



大学院学校教育研究科専門職学位課程

目 次

《本 文》

1	学校支援プロジェクト科目のねらいと構成	1
2	科目の運営とサポート体制	3
3	学校支援プロジェクトの流れ	4
4	e－b o xの使い方	5
5	危機管理並びに連絡・相談窓口等	6

《連携協力校へのお願い》

1	教職大学院学生の発表資料等の確認のお願い	7
---	----------------------	---

《資料編》

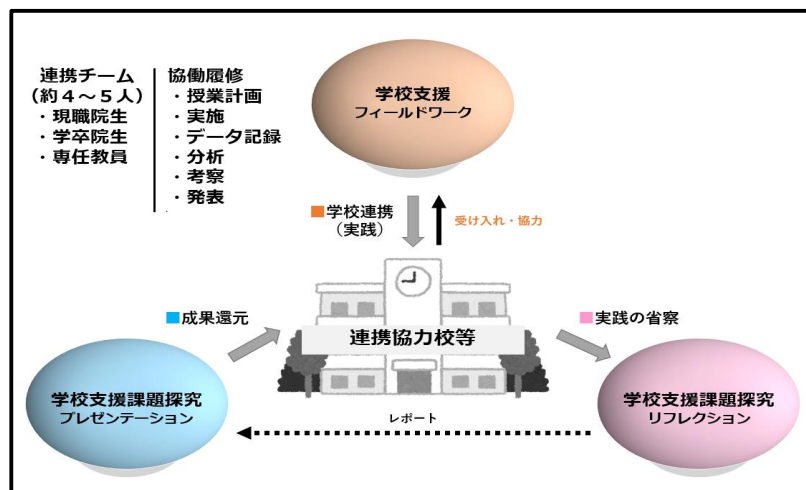
資料 1	学校支援プロジェクト計画書	9
資料 2	学校支援フィールドワーク個別計画表	10
資料 3	『学校支援プロジェクト実践研究』の様式	12
資料 4	学校支援フィールドワーク報告書	14
資料 5	学校支援フィールドワークの総合評価	19

教職大学院における実習について

教職大学院における実習については、中央教育審議会答申等において、学校経営、学級経営、生徒指導、教育課程経営をはじめ学校の教育活動全体について総合的に体験し、考察する機会とする必要があり、また、学部段階における教育実習を通じて得た学校教育活動に関する基礎的な理解の上に、長期間にわたり、教科指導や生徒指導、学級経営等の課題や問題に関し自ら企画・立案した解決策を実験的に体験・経験することにより、自ら学校における課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うものであることが必要であるとされています。

このため、教職大学院における実習では、学部段階における教育実習をさらに充実・発展し、実践的な指導力の強化を図る観点から、10単位以上、「学校における実習」を含めることとされています。

1 学校支援プロジェクト科目のねらいと構成



学校支援プロジェクトの概念図

※遠隔教育活用修学プログラムでは、院生の所属校が「連携協力校」にあたり、本ハンドブックでは、「実習校」と表記します。また、チームは、該当院生と専任教員での編成になります。

本学においては、学校実習を「学校支援フィールドワーク」とし、それと「学校支援課題探究リフレクション」、「学校支援課題探究プレゼンテーション」の2つの科目をあわせて「学校支援プロジェクト」として実施しています。「学校支援プロジェクト」は、リフレクション(実践の省察)とプレゼンテーション(成果の還元)を組み合わせた本学独自の特色あるカリキュラムです。「学校支援(実践)」、「実践の省察」、「成果の還元」という一連の活動を通して、臨床力・協働力を高め、即応力を身につけるといったコンセプトです。次頁の表のように現職大学院生と学卒大学院生では科目の構成が異なります。なお、教員としての経験年数や資質を考慮し、審査により学校支援フィールドワークⅠ・Ⅱの履修を一部免除する制度があります。

また、臨床力、協働力、即応力のコンセプト概念の定義は、次のように考えています。

臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力（より具体的には、これまで積み上げられてきた臨床的な研究成果、すなわち、臨床的な実態把握や提言を基本的に活用しながら、具体的に教育現場の教育課題を解決する力）

協働力

教員同士はもちろん、保護者や地域の人々など、様々な人々とのつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

代表的な科目の構成

大学院生 (現職教員)	学校支援フィールドワークⅠ(現職) ^{※1}	3単位
	学校支援フィールドワークⅡ(現職) ^{※1}	3単位
	学校支援フィールドワークⅠ(特別)	2単位
	学校支援フィールドワークⅡ(特別)	2単位
	学校支援課題探究リフレクションⅠ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究リフレクションⅡ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅠ ^{※2}	1単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅡ ^{※2}	1単位
大学院生 (学部卒業生)	学校支援フィールドワークⅠ(ストレート)	5単位
	学校支援フィールドワークⅡ(ストレート)	5単位
	学校支援課題探究リフレクションⅠ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究リフレクションⅡ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅠ ^{※2}	1単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅡ ^{※2}	1単位

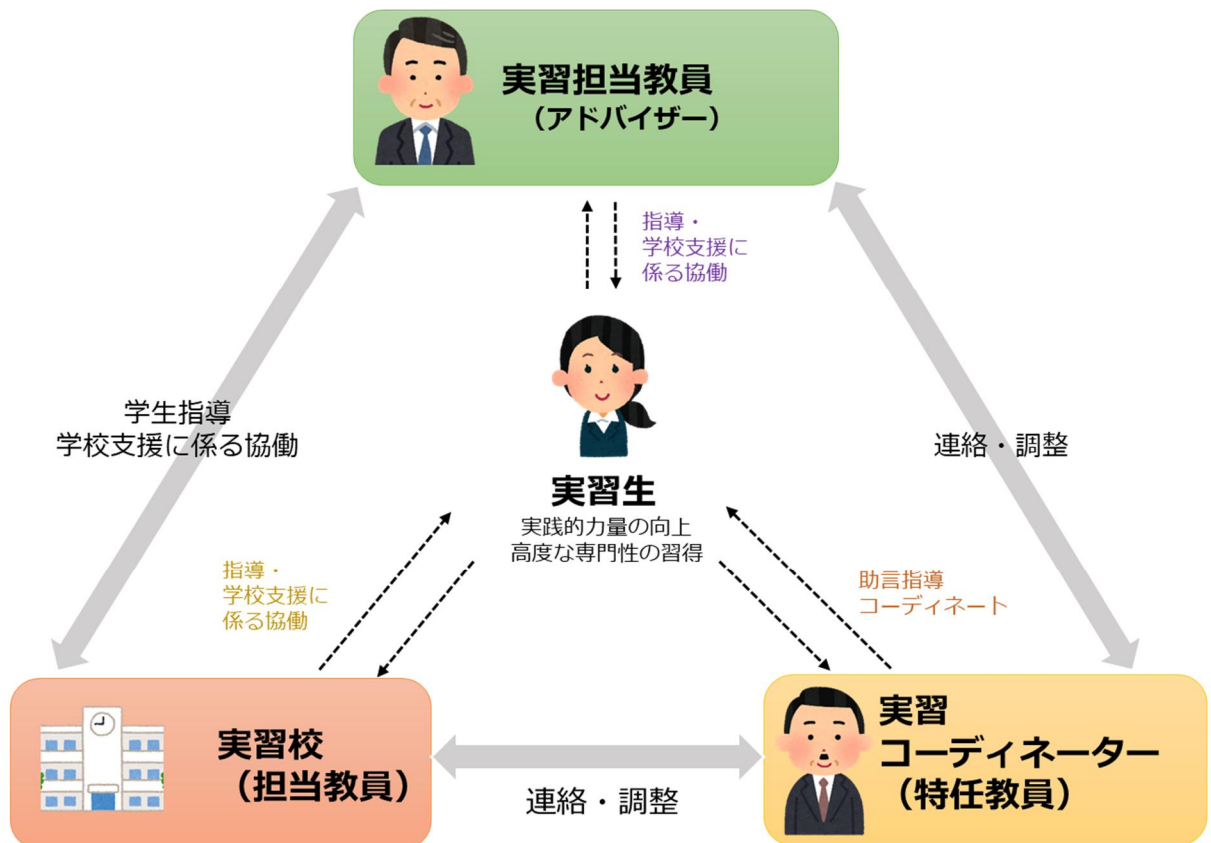
※1 教員としての経験年数や資質を考慮し、審査により免除となる科目です。

※2 コース等により、名称と単位数が異なります。

2 科目の運営とサポート体制

教職大学院では、指導教員（アドバイザー）が、実習担当教員になります。

科目の運営は、アドバイザーの指導のもとで行います。遠隔教育活用修学プログラム担当の実習コーディネーター（特任教員）も必要な場合に支えています。



3 学校支援プロジェクトの流れ

令和8年度 学校支援プロジェクト年間計画（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）

時期	大学	アドバイザー 活動内容	大学院生 活動内容
実習開始前		<ul style="list-style-type: none"> ・学生に学校支援プロジェクトの概要を説明 ・アドバイザーと学生は、具体的な活動内容等について協議し、「学校支援プロジェクト計画書」を作成 	
		<ul style="list-style-type: none"> ・アドバイザーは実習を開始する1か月前までに「学校支援プロジェクト計画書」を教務課へ提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生は「学校支援フィールドワーク個別計画表」を作成し、アドバイザーへ提出
4月以降		学校支援フィールドワーク開始(随時)	
		<ul style="list-style-type: none"> ・e-boxの「活動記録」やリフレクションを通じて、学生を指導 ・適宜リフレクションを実施 ・必要に応じて、実習校を訪問し、学生を指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学生はe-boxに「活動記録」を入力 ・今年度から学校実習を開始し、実習の一部履修免除を希望する場合は、5月11日(月)までに申請書類を揃え、教務課へ提出
12月		<ul style="list-style-type: none"> ・学校実習の一部を次年度へ持ち越す場合は、教務課へ報告 	
12月～ 2月上旬		<ul style="list-style-type: none"> ・『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿を作成 ・『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿は連携協力校等の確認を得て、教務課へアドバイザーが提出 	
2月中		<ul style="list-style-type: none"> ・学校支援プロジェクト成果発表（個別） ・2月17日(水) 学校支援プロジェクトセミナー（成果発表全体会） 	
2月上旬～ 2月中旬	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校支援プロジェクト計画書」の提出を依頼 ※提出期限 実習開始1か月前まで 		<ul style="list-style-type: none"> ・学生は「学校支援フィールドワーク報告書」を作成し、アドバイザーへ提出
		<ul style="list-style-type: none"> ・「学校支援フィールドワーク報告書」に基づき「学校支援フィールドワークの総合評価」を作成し、実習関連(リフレクション・プレゼンテーション)科目とともに成績評価として教務課へ提出 ・評価後、「学校支援フィールドワーク報告書」を学生へ返却 	

4 e-box の使い方

(1) e-boxとは

上越教育大学大学院におけるインターネットを活用したフィールドワークの活動記録を蓄積するデジタルティーチングポートフォリオシステムである。記録は、大学内のサーバに保存される。

(2) 利用目的

- ① 活動記録を蓄積し、実習日誌とする。
- ② 日々の活動記録を振り返り、リフレクションやプレゼンテーションに利用する。
- ③ 次年度以降の院生に活動報告等を公開し、実習の参考にする。

(3) 利用方法

① 利用開始手順

- i JUEN 認証サイトへログインする。

<https://portal.myjuen.jp/>

- ii メニュー（コンテンツの一覧）から e-box を選択し、e-box にログインすると、トップページが表示される。
- iii 「実習日誌」に入力する前にまず、「実習シート」に基本データ（実習期間や実習校名）を登録する。
- iv 日々の活動記録を「実習日誌」に入力する。
- v 操作方法の詳細は、操作マニュアル（ログイン後の「お知らせ」又は下記 URL から閲覧可能）を参照すること。

◆操作マニュアル URL

<https://drive.google.com/drive/u/0/folders/139y9t7rPtpN2PgBqdTl1W7IgKALmGWAP>

② 記録の公開

- i 大学教員及び院生に限定する。ただし、学校長等からの要望があれば、学校等内に限定して公開する。
- ii 記録は、個人情報等に十分配慮する。記述に当たっては、個人の氏名等の個人情報が特定できないように記述する。（氏名はイニシャル等で表記するなど）

(4) 日々の活動記録（日誌）

- ① 実習日誌及び出席簿を兼ねるため、日誌とする箇所は公式文書扱いとする。
- ② 当該院生の修了後5年程度は保存し、その後は削除する。
- ③ 相互閲覧機能及びコメント機能を利用し、アドバイス等の記入が可能である。
- ④ 実習期間（日）以外の記録も可能とする。

5 危機管理並びに連絡・相談窓口等

(1) 災害や事件・事故等発生時の対応

学校実習の活動に伴って、院生がかかわる災害や事件・事故などなどが発生した場合は、実習校の危機管理マニュアルに従って対応する。

(2) 連絡・相談窓口

学校実習で生じたトラブルは実習担当教員（アドバイザー）が担当する。しかし、緊急時で実習担当教員に連絡がつかない場合には、教務課遠隔教育活用修学プログラム担当に連絡すること。連絡を受けた担当は、実習担当教員に連絡をとるとともに、実習コーディネーター（特任教員）と初期対応を実施し、担当部署等に引き継ぐ。

教務課 遠隔教育活用修学プログラム担当

電話 025-521-3278

e-mail enkakup@juen.ac.jp

(3) 保険等の適用について

- ① 実習先との往復中、交通事故を起こした場合
→原則、運転者が加入している保険で対応。
- ② 実習中、児童生徒等に怪我をさせた場合や学校の備品等を壊した場合
→原則、実習生が加入している学生教育研究賠償責任保険で対応。
- ③ 実習中、怪我をした場合
→原則、実習生が加入している学生教育研究災害傷害保険で対応。

(4) 服務・勤務

学校現場においては、学校の服務規程に沿って、校長の指示に従う。

(5) その他

学校支援プロジェクトにおける個人情報に関わること（児童生徒の顔写真等を含む）をSNS等へ書き込むことを禁ずる。

《実習校へのお願い》

年 月 日

学校支援プロジェクト実習校長 様

上越教育大学大学院教育実践高度化専攻

教職大学院学生の発表資料等の確認のお願い

貴職におかれましては益々ご清祥にお過ごしのこととお喜び申し上げます。

日頃より本専攻の教育活動に対しまして格別のご高配をいただき、誠にありがとうございます。

さて、本学教職大学院のカリキュラムでは、学校支援プロジェクト実施チームはその時点での取組や成果等を発表するように計画されております。また、その成果は広く社会に還元するよう文部科学省からも求められているところです。そこで、取組や成果等の発表の場を学内及び学外の教育関係者にも広くご案内することにしております。

つきましては、ご多用の折、誠に恐縮ですが、毎年2月に開催を予定しております「学校支援プロジェクトセミナー」等の発表原稿及び成果報告として作成する『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿をご確認のうえ、不適切な点がありましたらご指摘くださるようお願いいたします。

なお、発表原稿等の作成において、本専攻では以下のことを申し合わせておりますので、申し添えます。

- 1) 学校支援プロジェクトが各実習校等の課題をもとに、解決することを実習の目的とする。
したがって、その発表においては各実習校等の課題を扱う。しかし、各校のこれまでの歩みや取組を否定するのではなく、その課題を解決しようとする学校の姿勢と改善成果を強調するようにする。
- 2) 発表内容については、実習校の校長等と協議する。特に、個人情報については法令に基づき慎重に取り扱う。
- 3) 発表資料や発表風景等の画像や映像を本専攻・実施チーム内部で記録保存することはあるが、決して外部には出さない。また、それ以外の部外者が記録することを禁止する。
- 4) 学校支援プロジェクトセミナー等の発表時には、発表資料を当日の参加者に配布する。
- 5) 発表原稿等については、内容の整合や個人情報等について、事前に実習校から指導を受けるものとする。事前に指導助言を受ける場合は、実習校の負担にならないよう留意する。

資料編（書式等）

- 資料1 学校支援プロジェクト計画書（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）・・・9
※チームで作成
- 資料2 学校支援フィールドワーク個別計画表（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）
※個人で作成・・・10-11
- 資料3 『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿
*原稿の様式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
*原稿の見本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- 資料4 学校支援フィールドワーク報告書（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）
※個人で作成
- *学校支援フィールドワークI報告書・・・・・・・・・・・・14-15
- *学校支援フィールドワークII報告書・・・・・・・・・・・・16-18
- 資料5 学校支援フィールドワークの総合評価（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）
※アドバイザーが作成・・・19

※資料は Google ドライブ上に保存されています。適宜ダウンロードのうえ、使用をお願いします。

【保存先】

資料1～4（大学院生向け）

共有アイテム → [FS] 全学共有 → 16_学校実習関係 → 01_学校支援プロジェクト関係各種様式
https://drive.google.com/drive/u/0/folders/1W3oFXEVfF1_QnV_H3mbg9HrYRSd_zK22

資料1～5（アドバイザー向け）

共有アイテム → [FS] 教職員ファイルライブラリ → ファイルライブラリ → K179 学校実習
→ 各種様式（連携提案書・計画書・報告書など） → 学校支援プロジェクト（計画書・報告書等）
https://drive.google.com/drive/u/0/folders/16puUPBLFlz1I_-JnaEpLWpTulIOhrnJg

資料 1

令和 8 年度 学校支援プロジェクト計画書（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）

1. 実施チーム

アドバイザー教員 氏名：

院生（学籍番号・氏名）

学籍番号

氏名

2. 実習校等

学校等名：

学校長等：

3. 実習テーマ

テーマ：

4. 具体的な実習内容の概要

5. フィールドワーク計画

1) 期間 月 日～ 月 日

2) 具体的な院生の活動

3) フィールドワーク時間の割り振り

4) アドバイザーの活動（訪問指導計画を含む）

6. リフレクション計画

7. プレゼンテーション計画

8. 資料の公開及び形式等

9. その他

資料2

個別計画表（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）（Ⅰ・Ⅱ共通）

学校支援フィールドワーク個別計画表（遠隔教育活用修学プログラム履修者用）

1 実習生の状況

実習生氏名		学籍番号	
実習生連絡先			
取得済みの教員免許			

2 学校支援フィールドワークに参加するための準備状況

1 これまでの教育活動・研究活動 (現職経験において意識してきた課題や、実習生の指導経験などを踏まえて記入。フィールドワークⅡの場合はⅠの経験を含む。)	
2 その他	

3 実習先および担当者

実習期間(予定)			
実習校名			
学校長名			
実習校住所等	〒 住所： TEL： FAX：		
学校規模	学級数		児童生徒数
	教員数		
教育目標			
重点目標			
特色ある教育活動			
地域の特色			
その他			

4 実習の主な活動に関する目標

学校課題における目標	(学校課題)
	(学校課題に対する実習の目標)
実習者個人の目標 ※1	教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した目標

※1…実習校の課題を踏まえて、教職大学院の3つのコンセプトに基づく評価基準を参照し、「実習者の目標」を策定する。(学校支援プロジェクトハンドブック 14～19 ページの自己評価項目を参照。)

5 実習計画

学校課題における計画	◎学校課題に対応する活動・取組の計画
実習者個人の計画	◎教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した活動・取組の計画

『学校支援プロジェクト実践研究』の様式

1 書式

- ① 余白（上下25mm、左右20mm）、各文字サイズは次ページの書式と同一にする。
- ② 文字数および行数は本書式を基本とするが、場合によっては変更して良い。
- ③ A4サイズ
- ④ 原稿は4～6ページとする。
- ⑤ 下部中央にページ番号を振ること。

2 提出について

- ① 提出前に、原稿について実習校等の確認を得る。
- ② 2月上旬の指定する日時までに、アドバイザーを通じて教務課学校実習チームに提出する。
- ③ 提出原稿はPDF形式とし、教務課学校実習チームへメールで送付する。
- ④ ファイル名は実習校名とする。
- ⑤ 提出後の原稿修正は受け付けない。

算数授業で「思考力・判断力」をどう育成するか

(↑MSゴシック14ポイント)

上越市立〇〇小学校チーム (←MS明朝12ポイント)

上越 太郎 (M1)

柏崎 上教 (アドバイザー)

要約 (←MSゴシック10.5ポイント)

学校支援の目的は、次の2点である。第1は、

 第2は、

。この結果、以下が明らかになった。

 (←MS明朝10.5ポイント)

キーワード：学び合い、人間関係、意識の変容

I 問題の所在 (←MSゴシック10.5ポイント)

最近の〇〇教育では、基礎基本の定着を図るとともに、主体的に問題解決できる能力が求められている。(←MS明朝10.5ポイント)

〇〇・〇〇(1994)は、〇〇概念を通して〇〇提示における概念変容の研究を行った¹⁾。それによると、事象をうまく〇〇できないときに〇〇的〇〇が生じ、その〇〇のために概念変容が起こると捉えている。つまり、概念〇〇

II 支援の実際 (←MSゴシック10.5ポイント)

1、実態調査 (←MSゴシック10.5ポイント)

質問紙調査およびインタビューにより、支援校の実態を調査した。.....

.....

引用文献・参考文献

1)〇〇・〇〇：「〇〇提示における生徒の概念の変容－〇〇を事例とした〇〇概念に関して－」、
 〇〇学会研究紀要、Vol. 〇〇、1

III 考察

1、〇◎

最近の〇〇教育では、基礎基本の定着を図るとともに、主体的に問題解決できる能力が求められ

.....

学校支援フィールドワーク報告書（遠隔教育活用修学プログラム履修者）

【授業科目：学校支援フィールドワーク I（現職）】

所 属：
学籍番号：
氏 名：
実習校名：

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（遠隔教育活用修学プログラム履修者I）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A~D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A~D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
④	①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだすことができているか。	
⑤	他者が①～④ができるようにサポートすることができているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	臨床力に関する課題は明確に自覚されたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

学校支援フィールドワーク報告書（遠隔教育活用修学プログラム履修者）

【授業科目：学校支援フィールドワークⅡ（現職）】

所 属：
学籍番号：
氏 名：
実習校名：

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（遠隔教育活用修学プログラム履修者Ⅱ）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
④	①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだすことができているか。	
⑤	他者が①～④ができるようにサポートすることができているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	臨床力に関する課題を改善できたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(2) 協働力

教員同士、保護者や地域の人々など、様々な人々となつながらを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

番号	自己評価項目	自己評価 (A~D)
①	チームに参加できているか。	
②	チームの中で役割を自覚し、貢献しているか。	
③	チームをまとめる役割を担い、貢献しているか。	
④	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々となつながらを見出し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
⑤	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々との間に協働性を構築し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
(①~⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	協働力に関する自己の課題を改善できたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(3) 即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A~D)
①	フィールドワークを通して自己の実践的課題を自覚できたか。	
②	実践的課題を克服するために何が必要かを認識できているか。	
(①~②の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
③	即応力に関する課題を改善できたか。	
(③に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

資料5

(遠隔教育活用修学プログラム履修者Ⅰ・Ⅱ共通)

学校支援フィールドワークの総合評価（遠隔教育活用修学プログラム履修者用Ⅰ・Ⅱ共通）

授 業 科 目	学校支援フィールドワークⅠ又はⅡ（現職）（特別）（特別：教育経営）		
実 習 校 名			
所 属 コ ー ス			
実 習 生 氏 名		学籍番号	

実習校によって、実習態度、実習の成果等が評価され、実習前の個別計画、実習後の報告・レポートにより評価をアドバイザーが行い、これらを総合的に評価する。次の各項目の点数の総計によりS、A、B、C、Dの5段階で評定する。

総合評価

評価科目	評価観点	配点		点数
		個人	チーム	
1 学校課題 解決に対する 活動	<ul style="list-style-type: none"> ・学校課題解決の計画策定とその実現可能性 ・学校課題解決推進の方略 ・具体的活動の展開 ・活動成果のとりまとめ 	個人	20	
		チーム	20	
2 実習者の 目標、目的、課 題	（臨床力に関して） ① 実践をより客観的・記述的な事実として見取る。 ② ①で得たデータを学問知に基づいて適切に解釈・分析・考察する。 ③ ②の結果から実践の改善案等を導く。 ④ ①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだす。	20		
	（協働力に関して） ① チームに参加できている。 ② チームの中で役割を見だし、チームに貢献している。 ③ チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながり、学校の教育課題解決に貢献している。 ④ チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々との間に協働性を構築し、学校の教育課題の解決に貢献している。	20		
	（即応力に関して） ① 教育現場の現状を理解している。 ② 学校の教育課題の解決のために、臨機応変に対応している。 ③ 臨床力・協働力を発揮して、チームで教育課題に対応している。	20		
合 計				
総 合 評 価				

特記事項

アドバイザー